



## ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、メンバー諸君が仲間と貴重な、しかも楽しい音楽経験を積み重ねて、はや第26回目となりました。今回の演奏会は客席の皆様にもすっかりお馴染みになりました指揮者に前回第25回定期演奏会でロット作曲、「ユリウス・カエサル」前奏曲を指揮していただいた、滝本秀信氏をお迎えし、先生のご指導のもと、ますます努力と研鑽を積み重ね、魅力あふれる曲を披露してくれるものと期待致しております。

本日の聞き所は後期ロマン派、ブルックナー作曲の交響曲第7番です。ブルックナーは少年時代からオルガンが得意で、宗教音楽（特にミサ曲）の巨匠として有名でした。彼の交響曲の特徴は、オルガンの様なファンファーレとして金管楽器を多用し、緊張感を高めています。又、第2楽章のアダージョの長大さは他の作曲家の比ではなく、終楽章にはミサ的要素を取り入れて重厚さに重点を置いています。この第7番は、敬愛するワーグナーの死の報に接し急遽、葬送曲を挿入し、1884年12月30日にライプツィヒのゲヴァントハウスで初演され大成功を収めております。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました会員の皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田之宏

「音楽を教える」ということは他の分野の教育とはちょっと違っていています。学問を生徒に教える場合、教える側の知識や経験を次の世代に伝えればよいのですが、音楽はそうではありません。自分の持っているものを生徒にコピーするのでは教えたことにならないのです。音楽を教える、とは生徒が持っているものをいかにして音楽的に優れたものへと導きだせるか、その方法を教えることだと思います。ここはこう演奏しなさい、というのではなく、どう演奏するのがいいか生徒にみずから発見させることが大事なのです。私たちも常に教わる身です。指導者の助言には謙虚に耳を傾け、より良い演奏を心がけたいと思っています。きょうもそんな思いで演奏しますのでどうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡武志

## お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- ・携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器の電源は必ずお切りください。
- ・演奏中の私語は固くお断りいたします。
- ・客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- ・補聴器がまれに異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- ・演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- ・「咳エチケット」にご協力ください。咳、くしゃみがこらえられないときは、ティッシュやハンカチ等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。

京都芸術センター制作支援事業

# 京都フィロムジカ管弦楽団 第26回定期演奏会

2009年12月6日(日) 午後2時開演 京都府長岡京記念文化会館

1:15～ ロビーコンサート

## 🎵 曲目 🎵

フォーレ/組曲『ペレアスとメリザンド』作品80

Gabriel FAURÉ(1845-1924): PELLÉAS ET MÉLISANDE Suite pour Orchestre, Op. 80

1. 前奏曲 2. 糸を紡ぐ女 3. シシリエンヌ 4. メリザンドの死  
I. Prélude II. Fileuse III. Sicilienne IV. La Mort de Mélisande

— 休憩 —

ブルックナー/交響曲第7番 ホ長調 (ハース版)

Anton BRUCKNER(1824-1896): Sinfonie Nr.7 E-dur (Herausgegeben von Robert Haas)

- I. Allegro moderato II. Adagio III. Scherzo IV. Finale

指揮 滝本 秀信

---

## 🎵 ロビーコンサート 🎵

### クレスポ/金管楽器のためのブルックナー・エチュード

Wag-Tb.: 黒田、野田(啓) Trb.: 丸山、河原田、柴田 Tub.: 中塚

### ワーグナー/歌劇「ローエングリン」より

Wag-Tb.: 吉野、野田(啓)、黒田、山田

クレスポ作の「ブルックナー・エチュード」は、ブルックナーの演奏技法を追求して書かれた金管楽器のための練習曲であり、対してワーグナーは、ブルックナーが敬愛した作曲家である。ブルックナーが敬愛した作曲家の音楽とブルックナーの影響を受けた音楽を、ブルックナーの尊敬したワーグナーが考案したワーグナーチューバを用いたアンサンブルでお楽しみください。(黒田)

### ベルナール/ディベルティスマンより

Fl.: 江藤、海堀 Ob.: 石原、坂田 Cl.: 田中(慎)、南井 Fg.: 石塚、大澤 Hr.: 坂口、草木

ジャン・エミール・ベルナールはフランスの音楽家で、フォーレと同時期に生きオルガニストとして名を馳せた人物のようだ。管楽合奏のためのディベルティスマンは四つの部分から成る長大なアンサンブル曲。管楽器のそれぞれの楽器の音色を生かした生き生きとした曲で、後のフランス音楽に特有のお洒落さを予感させてくれる。(田中慎一郎)

### ブラームス/クラリネット五重奏より第四楽章

Vn.: 田中(せ)、山口(陽) Va.: 吉川 Vc.: 小林 Cl.: 田中(慎)

ロマン派の大家ヨハネス・ブラームスが五十八歳からという晩年の時期に発表したクラリネットシリーズとでも言うべき曲の一曲。この楽章は変奏曲形式で冒頭のテーマを次々と変奏し様々な曲想を体現し、交響曲四番のパッサカリアを彷彿とさせる。そして、最後に第一楽章のテーマが戻りいかにも締靦を表すような深いフォルテとピアノの和音で曲は閉じられる。(田中慎一郎)

## 指揮者

### 滝本 秀信 (たきもと ひでのぶ)



指揮を汐澤安彦氏に学び、JBA日本吹奏楽指導者協会認定指導者として活動をするかたわら、指揮法を伊吹新一、編曲・和声学を櫛田肤之扶の各氏に師事。95年より国外においてオーケストラ指揮の研鑽を積み、クルト・レーデル（イタリア・レスピーギ音楽院）、リヒアルト・エデリンガー（ウィーン国立音楽大学）、アレクサンドル・ヴェデルニコフ、レオニード・ニコラエフ、イーゴル・シュテッグマン（モスクワ国立音楽院）、アレキサンドル・カントロフ（サンクトペテル

ブルク・バレエ・シアター）各氏に師事。

ロシアへは度々渡り、リムスキー=コルサコフ作曲『交響組曲シェヘラザード』チャイコフスキー作曲『交響曲第5番』他を次々に指揮し好評を博す。また、『ナタリー・ショケット・オペラ・コンサート』京都公演、京響特別演奏会・大友直人指揮フォーレ作曲『レクイエム』、京響460回定期演奏会・同氏指揮ベートーベン作曲『交響曲第9番』等の合唱指揮、バレエ専門オーケストラ・ウイングフィルハーモニー管弦楽団音楽監督として、横須賀芸術劇場における伊与田バレエスタジオ『白鳥の湖』全幕公演、アミ・ドゥ・バレエ『くるみ割り人形』『パキータ』『コッペリア』全幕公演他を指揮。本場ロシアにおいてもサンクトペテルブルク・バレエ・シアター『白鳥の湖』全幕を成功に収め絶賛を受ける。堺フィルハーモニー交響楽団と取り組んだ“モダンダンス&クラシック音楽”という異色のコラボレーションも話題を呼んだ。

07年ブルガリア・ブラツァ・フィルハーモニー・オーケストラを客演指揮。ドボルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」及び同「チェロ協奏曲」をアナトーリ・クラステフ氏と共演し、スタンディングオベーションによる絶賛を受ける。08年チェコにおいても西ボヘミア交響楽団を客演指揮する等、意欲的に活動をしている。

これまでに、ウクライナ国立フィルハーモニー、ロシア国立サンクトペテルブルク・シンフォニー・オーケストラ“クラシカ”、同市オーケストラ・ザゼルカーリ、ブルガリア国立ブラツァ・フィルハーモニー・オーケストラ、チェコ共和国西ボヘミア交響楽団、京都フィロムジカ管弦楽団、ウイングフィルハーモニー管弦楽団、堺フィルハーモニー交響楽団、福井大学交響楽団、大阪市立大学交響楽団、京響市民合唱団、京都吹奏楽団、阪急百貨店吹奏楽団他、数多くの管弦楽団・吹奏楽団・合唱団の指揮をする。

## 曲目解説

### —曲目変更のお知らせ—

前回定期演奏会パンフレット紙上等において、前半プログラムの曲目を、諸井三郎（1903-77）作曲の『こどものための小交響曲』とお知らせしておりました。同曲は2006年に関西フィルハーモニー管弦楽団が演奏していることから容易に楽譜の入手が可能と考えておりましたが、同団に楽譜を提供した株式会社アイヴィが活動を停止し楽譜が行方不明になったという予想外の事態に直面いたしました。

その後、日本近代音楽館に総譜の手配についてご協力いただいたほか、パート譜がNHKアーカイブズに存在することもわかりました。しかし、このパート譜は本来貸し譜ではないこと、また、総譜からパート譜を作成するにしても著作権者からその許可が得られるかどうか不明であること、など不安要素が多いため、今回演奏会での諸井作品の演奏を断念いたしました。

諸井三郎はブルックナーの影響を強く受けた作曲家で、ブルックナーとのカップリング曲としてふさわしいと考えておりましただけに、このような事態になったことはまことに残念です。

これにともない前半プログラムの曲目を、選曲会議において次点であったフォーレ作品に変更いたしました。

### フォーレ／組曲『ペレアスとメリザンド』

ガブリエル・ユルバン・フォーレ（1845-1924）はフランスの作曲家で、「レクイエム」「パヴァーヌ」が有名だろう。当団でも第7回定期演奏会で「マスクとベルガマスク」を演奏したが、フォーレ独特の甘美で官能的な旋律は魅力的だ。きょうはメーテルリンクの戯曲を題材とした劇音楽を組曲でお楽しみいただきたい。タイトルの「ペレアスとメリザンド」とは男女の名前で、このように組み合わせると、たいがい叶わぬ恋や道ならぬ恋のお話だ。「ロメオとジュリエット」「トリスタンとイゾルデ」もそうである。しかしペレアスはロメオやトリスタンのような激しいものではなく、フランスらしい幻想的なやわらかい夢物語だ。時代は中世、架空の国アルモンドの世界へ案内しよう。

#### 第1曲：前奏曲（6分）

最初の、はかなげな弦の旋律はメリザンドをあらわす。のちにペレアスと恋に落ちることを暗示するかのようだ。遠くから聞こえてくる夫ゴローの角笛。

#### 第2曲：糸を紡ぐ女（3分）

弱音器を付けた弦の三連符が糸車の回るようすを描いている。その上に乗るオーボエの歌が美しい。

#### 第3曲：シシリエンヌ（4分）

たぶんどこかで聴いたことのある旋律。ハープのさざなみにフルートが口ずさむ。この曲のみ弟子のケ克蘭編曲である。

#### 第4曲：メリザンドの死（5分）

ゴローはペレアスを刺してしまう。そしてメリザンドの死。これは葬送行進曲だ。こらえきれぬ感情はやがて静かにおさまり、消えるように終わる。

（曲目推薦者 Hrn.長岡 武志）

### ブルックナー／交響曲第7番ホ長調（ハース版）

#### 【初演までの経緯】

アントン・ブルックナーは、1824年にオーストリアの農村・アンスフェルデンで、教師兼教会オルガニスト兼聖歌隊指揮者の息子として生まれた。ここはカトリックの信仰が盛んな地域で、現在も集落の至る所に十字架にかけられたキリスト像が祀られている。こうした環境から、野卑だが力強い農村の音楽と、敬虔な宗教音楽

の双方がブルックナーのバックボーンとなる。また、ブルックナーの音楽を聴くと、太陽の輝き、丘陵地帯の優美な風景、木の葉の葉擦れの音など、自然の情景が浮かんでくる。これらも、故郷アンスフェルデンを優しく取り巻いていた自然に違いない。

幼くして父親を亡くしたブルックナーは、アンスフェルデンから歩いて2時間ほどのところにある聖フローリアン大修道院（表紙写真）の寄宿学生となる。ここでブルックナーは信仰を一層深める一方、修道院付属教会の大オルガンに親しむことになる（ブルックナーは後にこの教会のオルガニストとなり、現在はこのオルガンの下にある地下墓所に眠っている）。成人したブルックナーは、オルガン演奏の非凡な能力を生かし、聖フローリアンから歩いて4時間ほどのところにある上オーストリア州の州都リンツの大聖堂オルガニストとなる。ここでオルガニストや合唱指揮者として活躍する一方、一流の名教師たちのもとで作曲理論を学んだ。彼が学んだ作曲理論は古典的で厳格なものであったが、一方で11歳年上のリヒャルト・ヴァーグナーの音楽に傾倒し、その前衛的な和声法の影響を強く受けた。

敬虔な信仰者であったブルックナーはまずミサ曲などの宗教音楽を作曲して絶賛を受け、40代を迎えてから交響曲の作曲に本格的に取り組むようになる。そして、音楽の都ウィーンに活動拠点を移すと、大学で音楽を教えながら交響曲の作曲に没頭する。しかしながら、交響曲作家としてのブルックナーは不遇であった。交響曲の上演が失敗に終わることも多く、特にウィーンでなされた第3交響曲の初演は、演奏が終わる前にほとんどの聴衆が帰ってしまうという惨憺たるものだった。ブルックナーの作品は当時としてはほとんど演奏不能と言えるほど技術的に難しく、作品の本質を伝えるような演奏ができなかったのであろう。

第7交響曲の初演はこうした失敗を踏まえ、ブルックナーの教え子たちが周到に準備を行い、苦い思い出の残るウィーンを避けてドイツのライプツィヒを初演の地に選び、新進気鋭の天才指揮者アルトゥール・ニキシュ（後にベルリン・フィルを率いる元祖“帝王”）に振らせる、という満を持しての体制で臨んだ。結果、初演は大成功。時にブルックナー60歳。以後、彼はシンフォニストとしての名声を確立していくことになる。

#### 【この曲の概要】

交響曲第7番は作曲に2年を要し、ブルックナー59歳の誕生日の翌日、聖フローリアン大修道院を訪問中に完成された。

6番以前の彼の交響曲は、短い主題をさまざまに変形させて、複雑で巨大な音の大伽藍を作るという、まるでバロック音楽のような印象を与える音楽であった。しかしこの7番は、魅惑的で息の長い旋律が用いられており、彼が生きた時代—後期ロマン派—の趣向にかなったものとなっている。光が降り注ぐような明るい響きと相まって、この曲はブルックナーの交響曲の中でも最も親しまれる曲となった。しかしながら、特に第4楽章などにはブルックナー本来の鋭角的で緻密なバロック音楽的構築美が聞かれる。流麗に歌うだけでは良い演奏にならないこの第4楽章が、ブルックナーに不慣れな指揮者や聴衆を悩ますことになる。

第1楽章—緩徐楽章—スケルツォ楽章—終楽章、という古典的な楽章構成を取る。各楽章は、上昇音型や鋭いリズムなど特徴的な素材によって綿密に関連付けられ、曲全体が一体感を持つ。

#### 第1楽章

3つの主題を持つソナタ形式を取る。速度指定はアレグロ・モデラート（中庸の快活さで）だが、旋律が伸びやかであるためゆったりとした印象を与える。ホルンとチェロで演奏される第1主題（譜例1）は天に飛翔するような崇高さと農村風景のように広々とした雰囲気と併せ持ち、木管で演奏される第2主題は鄙びた哀愁を漂わせる。このように第1・第2主題が穏やかな印象を与えるのに対し、第3主題は尖鋭的なリズムと厳粛な雰囲気と異彩を放つ。バロック音楽的な第4楽章をここで予告しているといえよう。コーダでは第1主題が再現され、長大なクレッシェンドを経て堂々と閉じられる。

譜例1 第1楽章第1主題



## 第2楽章

2つの主題群が繰り返される長大なアダージョ楽章。この楽章には4本のヴァーグナー・チューバが使用される。ヴァーグナー・チューバとは、その名のとおりヴァーグナーの要望によって作成された低音の金管楽器である。普段ホルンを吹いている人が持ち替えて演奏するが、ホルンよりも荒々しく重い音がする。ヴァーグナーは楽劇の中で、父性の威厳や葬送の厳粛さを表現するのにこの楽器を使った。ブルックナーがこの楽章にヴァーグナー・チューバを使ったのもそうした楽器の性格を踏まえている。この楽章を作曲していたとき、彼は敬慕するヴァーグナーの死が近いと悟っていた。父のように圧倒的な存在だったヴァーグナーへの思いとその死の予感。そうしたブルックナーの沈んだ気持が、この楽器をしいた重厚なアダージョを書かせたのである。4拍子の第1主題はヴァーグナー・チューバを使用し深い悲しみが表出される。これに対し、3拍子で軽みのある第2主題はこの楽章の中で安らぎを感じさせるひとときである。楽章のクライマックスでは、同時並行して作曲されていた宗教的声楽作品『テ・デウム』から「私が未来永劫迷わされることがないように、主よ、あなたにお頼り申し上げます」の主題が引用される。

作曲中にヴァーグナーの訃報を聞いたブルックナーは、この楽章のコーダに葬送音楽を書いた。ヴァーグナー・チューバが悲しみの淵を這いまわるように蠢き、4本のホルンが慟哭のように一斉に吠えるが、最後は冥福を祈るように穏やかに閉じられる。

## 第3楽章

野性的な荒々しさを感じさせるスケルツォ。拍子は3拍子であるが、4小節単位で進行するため、3拍子の躍動感と4拍子的な落ち着きが共存した不思議な印象を与える。農村風景を夢見るような幻想的なトリオを挟んで、スケルツォ主部が再現される。

評価の高いブルックナーのスケルツォの中でもこの7番のスケルツォは出色の出来栄を誇るが、意外に名演が少ない。その原因は主題（譜例2）の奏法にあると思う。この主題は一見単純に見えるが、アクセントをどのように演奏するか、4小節目のアウフタクトのスタッカーティシモ（楔印 ▼）をどのように表現するか、など、実は多くの課題が突きつけられた主題なのだ。ベートーベン7番のように颯爽と演奏したり、また、主題提示がトランペットでなされることも手伝ってファンファーレのように勇ましく演奏したりする例が多いが、それらの奏法はいずれも誤りだと思う。合唱指揮者だったブルックナーは、アクセントに「深く息を入れてしっかりと歌い込む」といった要求を込めていたように思われる。また、ブルックナーがスタッカーティシモを書いた場合は、その音に重く力を込めることが求められており、「短く切れ」という指示でないと思う。そう考えるとこのスケルツォ主題は、粘り強い力を込めてオクターヴ跳躍を歌い切り、その力を4小節目のアウフタクトで念押しする、という、非常に無骨な演奏になるはずだ。「野人ブルックナー」にふさわしい主題と言える。

譜例2 スケルツォ主題



## 第4楽章

この楽章で再び4本のヴァーグナー・チューバが用いられる。第1楽章同様3つの主題をもつソナタ形式だが、第3主題→第2主題→第1主題の順で再現される変則的な再現部であるため、楽章全体が綺麗なシンメトリーを構成する。鋭いリズムをもつ躍動的な第1主題（譜例3）と簡潔かつ崇高な第2主題（モーツァルトのジュピター音型を彷彿とさせる）が対比されたあと、攻撃的な第3主題（譜例4）がフル・オーケストラで襲ってくる。

譜例3 第4楽章第1主題



譜例4 第4楽章第3主題



また、第3主題は第1主題に酷似しており、このことから第4楽章の構成を「A（第1主題）-B（第2主題）

—A' (第3主題)—展開部—A'—B—A—コード」とみることもでき、古めかしいロンド形式を彷彿とさせる。このような古風な形式、旋律線の綿密な絡み合い、鋭いリズムから、バロック音楽的な印象を与える楽章である。バロック音楽のように強拍弱拍の違いを強調し躍動的に演奏してみると、いかにも後期ロマン派を思わせる劇的な演奏とはまた違った魅力が出るのではないか、と思う。最後は第1楽章冒頭の上昇音型が再現され、全曲が見事な統一感を持って閉じられる。

#### 【版の問題から見えること —ハース版で演奏する意義—】

多少ブルックナーに詳しい人であれば、ブルックナーには複雑な版の問題があり、しかも「原典版」と呼ばれる版にもハース版とノヴァーク版に代表される複数の版があることを知っていることだろう。そして、7番の場合、ノヴァーク版は第2楽章のクライマックスでシンバルとトライアングルが鳴り響くのに対し、ハース版にはそれが無い、ということも有名である。今回我々はハース版で演奏するが、打楽器奏者がいない当団にとってこれは自明の選択である。しかしながら、もし仮に当団に打楽器奏者が3人以上いたとしても、僕はハース版での演奏を主張したに違いない。その理由を説明する前提として、ブルックナーの版や稿の問題を簡単に説明しておこう。

※「版」と「稿」の用語の違いは微妙なものであるが、僕は、改作により一つの曲に複数の形態が存在することの問題を「稿」の問題として、出版された印刷譜の違いの問題を「版」の問題として扱うことにする。

前述のようにブルックナーは交響曲作家としての評価が低かったため、彼や彼の教え子たちは、聴衆の評価を得やすいように改作を重ね、結果として以下の2つに大別できる問題を残した。

①いったん曲を完成させた後、ブルックナー本人が大幅な改作をしたため、作曲者の手による稿が複数存在する。3番、4番、8番がその典型である。ちなみに僕は、そのいずれも改作前の稿（初稿）が最も優れていると考えているが、その理由は28回定期のパンフレットで詳述したい。

②ブルックナー本人は改作をしなかったが、初演の際に教え子や指揮者が大幅に改作し（これは師の作品を普及させようとする真摯な思いからなされたものである）、その形のまま出版された楽譜（改訂版）が存在する。5番、9番がその典型である。教え子たちの改作は、オーケストレイションを華麗にし、テンポや強弱に劇的な変化をつけるといったものであり、いかにも後期ロマン派的な様相を呈することになる。しかし、先述したようにブルックナーの音楽は根本的にバロック音楽的であり、弟子たちの改作はそうしたブルックナーの本質を歪めてしまうものだった。ブルックナーのオリジナルの楽譜（原典版）が出版されるにおよび、教え子たちが改作した版はほとんど演奏されなくなる。

実際にはこの①と②が絡み合って複雑な様相を呈する。こうした中で、7番は例外的な位置を占める。曲の完成時点で作曲者にも教え子たちにも成功の手応えがあったためか、ブルックナー本人が書き直しをすることもなければ、教え子たちが大幅な改作をすることもなかった。つまり、7番には実質的に稿の問題は存在しない。ただし、初演の際に、完成時点ではまだ書かれていなかったテンポ指定やオーケストレイションの味付けがなされ、それが自筆譜に直接書き込まれた。僕は2楽章のクライマックス部分のページだけ自筆譜の実物を見たことがあるが、インクだけでなく鉛筆による書き込みもあり（たとえば、追加された打楽器にパートの上にかかれた「gilt nicht(無効)」の文字は鉛筆で書かれていた）、初演や楽譜出版の過程で何度も加筆がなされたことがうかがえる。その加筆を研究者がどう評価するかが、2つの原典版 —ローベルト・ハースによる版とレオポルト・ノヴァークによる版— の違いとして表面化しているのだ。

実は第2楽章のシンバルとトライアングルの問題は版を語る上で決定的な問題ではない。ハース版を使っているのにシンバルを追加する指揮者がいれば、逆にノヴァーク版を使いながらも打楽器はカットする、という指揮者もいるからだ。これら2つの原典版のもっとも重要な違いは、第1楽章のオーケストレイションの違いと、両端楽章のテンポ設定の違いである。

第1楽章のオーケストレイションは、ハース版では「薄い部分はとことん薄く、濃い部分はとことん濃く」という特徴が見受けられる。これに対し、ノヴァーク版ではそれらなるべく均質化しようとする傾向がある。ハ



ース版では弦楽のみで演奏される部分（練習番号D）やトランペット1本だけで演奏される部分（同G）に、ノヴァーク版ではホルンや木管が足されている。逆にハース版ではフル・オーケストラが弱音で演奏している部分（同E）が、ノヴァーク版では金管が大幅に削られている。ノヴァーク版は、ソロを怖がる演奏者、弱音を苦手とするオーケストラにとって有難いオーケストレイションと言える。また、ハース版でオーボエとクラリネットのユニゾンで演奏される主題（同Q）が、ノヴァーク版ではオーボエが省かれているのも興味深い。シューベルト『未完成交響曲』でも聞かれるオーボエとクラリネットのユニゾンというオーケストレイションは、独特の鄙びた響きが実に魅力的なのだが、両者のバランスを取るのが難しいため演奏者には嫌われる書き方なのだ。ハース版ではオーボエとクラリネットという組み合わせだったオーケストレイションが、ノヴァーク版ではオーボエが外されている、という現象は、4番のトリオにも見られる。

次にテンポの違いであるが、ノヴァーク版では第1楽章のコーダに「だんだんテンポを速めて」という指示があるほか、第4楽章でもテンポ変化の指定が事細かに書き込まれている。これらは初演の際に実際になされたテンポ変化に違いない。これに対し、ハース版にはテンポ変化の指示がほとんどない。ハースは自筆譜に記入されたテンポ変化の指示を、初演の際の追記であってブルックナーの本意ではないと見做したのである。ただし、これは「テンポを変えてはいけない」という意味ではなく、「テンポの変化は演奏者の自主的な判断に任されている」と認識すべきだと思う。

こうした違いからハースとノヴァークの根本姿勢の違いが垣間見える。ハースは作曲時点でのブルックナーの意図のみを再現しようとしているのに対し、ノヴァークは演奏者の現場の声を反映し、それこそ近衛秀麿の言葉（『朝比奈隆ベートーヴェンの交響曲を語る』p.19）を借りれば「馬鹿な指揮者と下手なオーケストラがやっても」初演で聴衆を熱狂させた演奏が再現できる親切な楽譜を目指している、と取れよう。確かに数回のリハーサルで本番をこなさなければならぬプロのオーケストラにとってはノヴァーク版のような「親切な」楽譜は有難いだろう。しかし僕たちは、半年という時間をかけて自分たちならではのブルックナー像を追求するアマチュア楽団だ。ノヴァーク版のいらぬお節介は不要である。

そして僕は、そもそも初演の際のテンポ設定（＝ノヴァーク版のテンポ指定）はブルックナーの独創性を歪めるものだと考えている。前述のように、ブルックナーの教え子たちは改作によって独創的なブルックナーの音楽を時代の色で塗りつぶしてしまった。5番や9番は原典版の出現によりブルックナーのオリジナリティを見直す好機に恵まれたが、版の問題が根本的には存在しない7番は粉飾された姿のままの演奏が現在も継続しているように思われる。ノヴァーク版のテンポ設定は確かに一理ある。第1楽章の最後でテンポが速められるのは、このコーダの堂々たる収束感を少しでも弱め、次の楽章への期待を聴衆に抱かせようという工夫であろう。テンポを速めずに堂々とした演奏をすると、まるで単一楽章の作品が演奏し終わったかの印象を与え、第2楽章の始まりが唐突に感じられてしまう。また、第4楽章の劇性に満ちたテンポ変化も、後期ロマン派の大曲のフィナーレとしては相応しいものであろう。伸びやかな歌に満ちた前半楽章に対し、フィナーレがバロック的なものではあまりにも唐突な印象を与えよう。このようにノヴァーク版のテンポ指定は、唐突な印象を回避し、説得力ある音楽の流れを作り出している。

しかし、である。唐突な変化、余人には理解しがたい音楽の流れ、これこそがブルックナーの独創的な魅力ではないのか！ そして、このブルックナーの独創性は、彼が愛した自然の姿にほかならない。僕がアンスフェルデンから聖フローリアン修道院へ向かう田舎道を散歩していたときのことだ。全くの静寂だったのに、風が吹き出すと突然、木々が大きな葉擦れの音を立て出したのにびっくりした。音が音を呼ぶように葉擦れの音はどんどん大きく重なり合っていたが、風がやむと一瞬で元の静寂に戻った。こんな小さな例からもわかるように、自然とは人間の理解を超えて唐突に変化するものはずだ。人間のちっぽけな考えでは理解できない唐突な変化を「不自然だ」などという言葉をつけて忌み嫌うのは、人間の驕りではないのか！ ブルックナーの、それもハース版の、唐突で人間の理解を超えた音楽は、そうした人間の浅はかな考えに反省を求めているように感じられる。

(Tp. 遠藤 啓輔)

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

渡辺 真人様	鎗本 和弘様	吉原 和敏様
渡辺 和美様	谷口 佳隆様	岡島 敦子様
松村 里香様	岡本 幸雄様	小松 朋美様
渡辺 一真様	信広 澄子様	鈴木 一俊様
渡辺 由加理様	横田 洋子様	谷村 暉様
渡辺 晴菜様	吉田 育弘様	辻 良治様
杉本 幸子様	吉田 寛子様	西 英子様
安藤 美知穂様	吉田 健太様	浅野 節子様
稲村 董雄様	木下 清美様	福田 稔様
遠藤 時金様	西坂 壽美子様	金谷 一紀様
井谷 宏美様	松浦 淳司様	

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(11月現在)

第26回定期演奏会開催にあたり、友の会の皆様より多大なご支援をいただきました。

この場を借りて、団員一同、心より御礼申し上げます。

∞「友の会」会員随時募集中∞

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円 【期間】 ご入会いただいた月より1年間

- 【特典】
1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
  2. その他演奏活動のご案内
  3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: tomo@kyotophilos.com

ご旅行は日本教育旅行で！！

各種旅行会社（JTB・日本旅行 etc）国内・海外  
パンフレット取扱い可能！！

他にもスポーツ・音楽合宿、スキー旅行、団体旅行も  
取り扱っております。

日本教育旅行株式会社

京都市下京区下数珠屋町通東洞院東入

TEL : 075-351-0405

<http://www.net-freeway.com>

担当 藤田 珠里

印刷のことなら

大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727 (代)

FAX (075) 256-4604

# 京都フィロムジカ管弦楽団

## Philomusica Orchester Kyoto

### Konzertmeisterin

山口 由美※

### Violine

芦原 靖子  
 小幡 拓也  
 小山 裕美  
 田中 せり花  
 山口 陽平  
 飯田 俊也◎  
 大藤 千佳◎  
 久保田 茜◎  
 栗山 真寛◎  
 塩田 怜奈◎  
 住谷 清子◎  
 谷口 僚◎  
 中野 大輔◎  
 西谷 真彦◎  
 西邨 奈穂◎  
 益子 一◎  
 松田 千怜◎  
 村中 三喜保◎  
 吉川 正剛◎  
 渡邊 達之輔◎  
 前川 信幸※  
 宮宇地 秀和※  
 見渡 あおい※  
 森園 博章※  
 山口 由美※

### Bratsche

河井 奈美◎  
 鈴木 景◎  
 高原 友洋◎  
 松浦 淳司◎  
 吉川 昌毅◎  
 池田 圭※  
 上田 秀樹※  
 富 研一※  
 山本 亮太※

### Violoncello

小林 豪  
 多田 進  
 波多野 文  
 池田 英馬◎  
 金子 岳史◎  
 舘 雅洋◎  
 塚田 毅◎  
 津田 博隆◎  
 本田 哲郎◎

### Kontrabaß

小道 信孝  
 茂原 尚樹  
 鳥山 拓  
 田中 郁太郎◎  
 松本 大樹◎  
 丸山 拓史※

### Flöte

江藤 佳美  
 海堀 梓  
 加藤 勇仁◎

### Oboe

石原 才子  
 坂田 翔太郎  
 野田 加奈

### Klarinette

安達 真未  
 田中 慎一郎  
 南井 菜穂子

### Fagott

石塚 有里子  
 大澤 純子◎

### Horn

芦原 俊平  
 片山 真吾  
 草木 美佐子  
 黒田 直樹 JAMES  
 (Tenor-tuba)  
 坂口 裕志  
 長岡 武志  
 野田 啓  
 (Tenor-tuba)  
 吉野 文彦  
 (Baß-tuba)  
 守谷 一樹※  
 (Baß-tuba)

### Trompete

遠藤 啓輔  
 竹内 恵理  
 中西 美智子  
 鈴木 香織◎  
 安井 正典※

### Posaune

河原田 佑美◎  
 柴田 英吾◎  
 丸山 亮祐◎  
 山口 亮治※

### Kontra-Baßtuba

中塚 隆介※

### Pauken

横山 堅司※

### Harfe

神前 千草※

◎：団友

※：客演奏者

### 顧問

和田 之宏

### 団長

長岡 武志

### 事務

西村 浩 (事務局長)  
 邑橋 明子

### 弦トレーナー

岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

### 管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

# 京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

## ♪第27回定期演奏会♪

2010年6月6日(日) 京都府長岡京記念文化会館  
ハイドン/交響曲第104番『ロンドン』  
芥川 也寸志/交響三章

## ♪第28回定期演奏会♪

2010年12月12日(日) 京都コンサートホール(大ホール)  
ブルックナー/交響曲第8番(初稿)

(予定)

## ♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか? まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿各府県に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。

「一緒に演奏したい!」という皆様のご参加をお待ちしています。

### ●募集パート ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス (弦楽器急募!!)

オーボエ・ファゴット・トロンボーン・打楽器

※トロンボーンはテナー、バスともに募集中。

※管楽器・打楽器はオーディションを行っております。

※コントラバスは団所有の楽器があります。楽器運搬に不安がある方はご相談ください。

〔練習日時〕 毎週日曜日 午後1時～午後5時 春と秋に2泊3日の練習合宿(大津市内)

〔練習場所〕 京都芸術センター、および河原町丸太町・荒神口周辺など京都市内各所

〔諸費用〕 活動費:3,000円/月 合宿費:15,000円程度 演奏会参加費:20,000～30,000円(学生は半額)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: [recruit@kyotophilo.com](mailto:recruit@kyotophilo.com)

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。